

早稲田大学日本語研究教育センター
CENTER FOR JAPANESE LANGUAGE
WASEDA UNIVERSITY

第 18 号

2005年1月

日本語センターニュース
CJL NEWS



目次

日本語センターニュース

CJL NEWS

VOL.18
2005
JANUARY

Contents

1 . 新所長のことば	1
● ことばを学ぶ人、応援します 日本語研究教育センター 所長 細川 英雄	
2 . 就任のことば	2
● 日本語は世界を見る窓 日本語研究教育センター 教務主任 川上 郁雄	
3 . 退任のあいさつ	3
● 30年間、ありがとうございました 川本 喬	
4 . 私と研究	4
● 「2004年度春学期別科総合5Aクラス」を振り返って 中山 由佳	
5 . 修了生のことば	5
● シアワセダ サントス・ウィリアン・ジアス	
6 . 課外活動	6
● 山形ホームステイ 朝日町の温かさ 金 廷煥	
● 山形ホームステイ もう一つの家族 ハーンナルタナン ルタイラット	
● 箱根旅行 グローバルの箱根 梁 里虹	
● 早明戦 12月の熱い戦い! 吉原 清美	
● 餅つき 餅つきの感想 マツアキ、ミロスラウ	
● 課外活動フォトギャラリー	
7 . 各国紹介	12
● スイスを知っていますか? デバスクアレ、ミカエル	
8 . 人物往来	14
● 新任のことば 齋藤 由香里	
9 . ブラジル見聞記	15
● ブラジルのクリスマス 松野 志穂	
10 . お知らせ	16
● 2004年度秋学期修了生のみなさんへ	
● 掲示板のお知らせ	
● 修了生の図書館利用について	
● 別科日本語専修課程：2005年度9月入学生募集	
● 2005年度日本語教育学公開講座のお知らせ	

新所長のことば



ことばを学ぶ人、応援します
日本語研究教育センター所長 細川 英雄

この9月から吉岡所長にかわって、日本語センターの所長になった細川です。

私の日本語教育は、1983年から1年間のフランスのパリ第三大学での経験からはじまります。早いものでもう20年も前のことです。

それまでは国語学の教師をしていましたが、この経験をきっかけに、しだいに日本語教育の世界に入り込み、いつのまにか日本語教育を自分の専門とするようになりました。

現在、興味を持っているのは、ことばと文化、そしてことばとアイデンティティの問題です。さらに、そのための教室はどのような場所なのかということを考える「教室環境論」という問題にも取り組んでいます。

ことばを学ぶということが、ただことばの形を学ぶだけに終わるのではさびしいと思います。ことばを使って、自分の考えていることをさまざまな相手とやりとりし、また相手の意見を受け入れながら、いろいろなことを考えていくという生活ができるようになってはじめて、ことばを学ぶ楽しさが見えてきます。

日本語センターでは、2004年度春学期から、今までの技能別・能力別プログラムに新しいコンセプトを加えて、新たなカリキュラムを発足させました。

2001年4月に開設した大学院日本語教育研究科の院生諸君も、この日本語センターのプログラムの中に実習生として参加し、留学生の皆さんとともに、ことばを学ぶことの意味について考えていきます。

世界中から集まった仲間たちとともに、ことばを学び、そして、さまざまな文化にも思いを寄せて、この日本語センターでの学習と生活が、皆さん一人一人にとってすばらしい経験となることを願いたいと思います。

それぞれの健闘を期待するとともに、皆さんの早稲田での1年間で、本当に充実したものになるように、私たちも総力を挙げて応援します。どうぞよろしくお願い致します。

就任のことば



日本語は世界を見る窓

教務主任 川上 郁雄

みなさん、2004年9月から日本語センターの教務主任と
なった川上郁雄です。どうぞ、よろしく。

日本語センターで日本語を学ぶ学生はたくさんいます。そ
の数は、年々増えています。遠い国からやってきた人、近く
の国から来た人、他の国の大学へ留学し、さらに早稲田大学
へ留学した人、日本に住んでいて入学した人など、さまざま
です。みなさんのクラスにも、そんな人がたくさんいるので

はないでしょうか。

では、そのようなさまざまな国から来た学生といっしょに日本語を学ぶことは、どのような意味がある
のでしょうか。少し、考えてください。

私はこう思います。日本語は小さな窓なのです。その小さな窓から外を見ることができます。その窓を
通して、いろいろな人に会います。日本語という窓を通して、いろいろな人と出会い、コミュニケーション
をとることになります。日本語の窓は、日本語を学べば学ぶほど、大きくなります。また、その窓は
いろいろな人と出会い、やりとりをすることで強くなります。日本語の窓から、さまざまな日本が見えて
きます。あるいは、いままで気がつかなかった世界が見えてくるかもしれません。

日本語という窓から見える日本の姿は、どんどん変化していくでしょう。なぜなら、日本語を学ぶとい
うことは、自分で日本の姿を形づくっていくことになるからです。つまり、日本語を学ぶことによって、
日本を、そして世界を見る目を鍛えていくことになるのです。

さあ、あなただけの日本語の窓を作り、そこから外をのぞいてみましょう。きっと、誰かがあなたの
窓辺にやってきて、新しい出会いが始まるでしょう。日本語があなたの新しい窓になることを、私は願っ
ています。



日本語事情2Aのクラスにて

退任のあいさつ



ねんかん
30年間、ありがとうございました

かわもと たかし
川本 喬

この3月で早稲田大学を退職することにしました。まだ仕事を続けることもできるのですが、健康の理由でそう決めました。30年あまりも早稲田にいたのですから、思い出もたくさんあります。

1974年に早稲田大学での私の日本語教育が始まりました。主に国際部で、アメリカの学生さんに初級の日本語を教えることが何年も続きました。そのころは、易しい日本語で分かりやすく話そうとすることがくせになり、ふだん日本人と話すときにも習慣になってしまい、私は自分で「初級病」にかかったと言っていたことも思い出します。

やがて、語学教育研究所の日本語の授業を担当するようになりました。そこでは、世界のいろいろな国からの学生さん達に、中級、上級も教えるようになり、初級病はかなり治りました。特に口頭表現のクラスが私には楽しいクラスでした。異なった国のいろいろな人が考えを交換することを中心とした授業だったからです。また、日本人の学生さんを対象にした文法や日本語教授法の授業も担当しました。その授業を受け、今は国内外の大学などで日本語の先生になっている人がおおぜいいます。実は、川口義一先生も私の授業に参加していたことがあったのです。



1988年に日本語センターが誕生しました。私達は、それまでよりもさらに良い日本語教育を行うためにいろいろなことをしました。いちばん最近行ったことは、AタイプとBタイプの日本語クラスを作ったことです。それは、まだ1年も経っていないので、結果がどうなるかは分かりません。結果が分かる前に大学を辞めることは残念です。けれども、この数年、体重が5キロ近くも減ったり、授業も思ったとおりに進められないようなことが起こったりしました。それで、健康

を少しでも回復させることが、私にとって今いちばん大切だと考えたのです。

吉岡先生、蒲谷先生とは特によく議論などをしました。木村宗男先生、北條淳子先生にはずいぶんお世話になりました。先生方、事務所の方、そして学生の皆さんに支えられて、30年あまり、私の好きな早稲田大学に勤めることができたのは皆さんのおかげです。ほんとうにありがとうございました。



「2004年度春学期別科総合5Aクラス」を振り返って

な か や ま ゆ か
中山 由佳



「このクラスでは、お芝居を作って、上演をします」

第1回目のクラスで、そう説明をしました。

2004年度春学期別科総合5Aクラスでは、「劇作り」という活動を行いました。

なぜ、「劇作り」なのでしょう。皆さんは、日本語という言語を勉強しています。「言語」は、表現コミュニケーションのための一つの手段です。私は、コミュニケーションをとるとき、「言語」だけではなく「身体」の状態にも注目することで、新しい可能性が見えてくるのではないかと考えています。「劇作り」は、「言語」と「身体」の両方を使います。

「役を演じる」ということによって「日常の自分とは違う人間になる」という経験もできます。自分が普段は言わないような台詞を言い、普段の自分とは違うキャラクターを演じることは、物事を別の角度から見るチャンスです。また、自分が隠している感情や考えを表現するチャンスでもあります。そして「劇作り」の空間は、「それをしてもいい」と保証してくれるのです。

クラスでは、まず身体を自由にするための体操や、言葉と身体を使ったシアターゲーム、即興劇などを行い、慣れてきた頃にお話作りを始めました。「コメディ」「留学生としての体験」「昔話のパロディ」など、いろいろなアイディアが出、それらを組み合わせてお話を作りました。話の内容は「タイ人のアリスが、言葉のわからない異世界（日本）で桃太郎と出会って冒険をする」というものでした。その中には、学生



たちの実際に経験した言葉の間違ひのエピソード（道に迷って「迷子だ」と訴えたのに、発音を間違えて舞妓さんの所に連れて行かれた、など）もたくさん入れました。公演は、戸山キャンパスにある学生会館で行い、多くのお客さんに来ていただきました。お客さんもよく笑ってくれて、公演は大成功でした。



今回の公演で印象的だったのは、学生の皆さんの楽しそうな姿と、想像力の豊かさです。「劇作り」には多くの可能性がある、と感じました。これからも、「劇作り」を日本語教育に生かすことについて考えていこうと思っています。

修了生のことば



筆者：中央

シアワセダ

サントス・ウィリアン・ジアス（ブラジル）
SANTOS, Uilian Dias

しょうがくせい のとき、テレビでポルトガル語に翻訳した日本のアニメや特撮シリーズをよく見た。音声はポルトガル語で放送されていたといっても、主題歌は日本語で聞こえた。あの時、日本語を聞いても、日本人の役者を見ても、日本につながることはほとんどなかった。

その数年後、テレビゲームが世界中で人気になって、日本製のゲームをやってみた時、漢字と仮名を初めて認識した。あの時、日本という国についてもっと知りたくなった。

言語学を専門に選んで、ブラジルのサンパウロ大学に入り、一年生の時から、色々な言語について学んだ。二年生になって、その中で、日本語の授業を受けることに決めた。その間に、大学の国際協力事務所（Commission of International Cooperation）で試験を受けて、驚いたことに、日本に留学することができた。二年間くらい日本語を勉強したから、日本語を少し話せたけれど、日本に来て、実際に日本語という言語を毎日の生活で使うのは初めてだった。一人暮らしの生活も初めてで、最初は料理、洗濯、掃除に戸惑った。

遠いブラジルから来た私は、日本の満開の桜、夏の蒸し暑さ、きれいな紅葉、冬の厳しい寒さを体験した。今年は日本人を驚かせるくらいの地震や台風の襲来という事件もあった。早稲田での生活の他、相撲、歌舞伎、早慶戦、もちつきなど、日本の代表的なイベントにも参加した。サークルに参加して、合宿までやったことがある。それぞれ一年間の素敵な出来事。

早稲田でたくさんの国の友達と知り合った、日本に留学するという夢を持っていた人、医者、生物学者、漫画好きの人、などなど。毎日の会話の中で文化の差、料理の作り方、新しい言葉、挨拶、ファッションを覚えた。

日本人の友達もできて、日本では携帯電話は欠かせないものだとことを覚えた。つきあい始めには友達と携帯電話番号の交換をし、その後、人気の店のアドバイスをもらったり、様々なイベント、飲み会へ行ったり、たくさん喋ったりした。早稲田大学の皆さんもとても親しみやすく、先生達や事務所の人達と学生関係を越えるくらい、仲良くなった。

早稲田でできた友達と一緒に、ずっと豊かな時を過ごしてきて、ついに母語と同じくらい、日本語が話せるようになった。

言葉を覚えるということは単に話ができるようになるということ以上の力がある。それがしあわせだ、言語を学ぶことの魅力だ。



筆者：左

朝日町の温かさ

金 廷奐（韓国）

Kim Jung Hwan

7月23日から7月25日まで「山形県」というところでホームステイがあった。これは夏の課外活動で、20人の別科生が参加するプログラムであった。今まで留学生として日本の家庭のことを良く知らなかった私は、この山形県のホームステイを通じて、学校では学べない日本人の生活や習慣などの日本文化について知ることができた。

ホームステイのことをふりかえってみると、たった3日間にいろいろなことがあった。

私たちは、早稲田大学からバスで7時間くらいかかる東北の「山形県朝日町」というところで3日間のホームステイを始めた。山形県朝日町はリンゴとワインが有名なところで、高い山の多い町である。高い山が見えない東京で生活している私は、周りの高い山にちょっと驚いた。最初に町の名前を聞いたとき、ここがアサヒビールで有名な町ではないかと思わくわくしたが、それと違うのを知って「ちょっと残念だな」と思った。しかし朝日町で3日間を過ごしながら、ここは本当に素晴らしいところであると思った。

まず、朝日町の人たちはみんな心も温かいし、情も厚いし、本当に親切な人であった。それで、私たちは3日間ずっと心の安らかさを感じられた。私のホストファミリーはまるで私を本当の息子のような愛情で面倒を見てくれて、韓国の家族と一緒にいるような感じがした。そして、ホストファミリーを「お父さん」と「お母さん」と呼びながら、家族のようにおいしいものを食べたり、いろいろな日本酒を飲んだり、朝日町のきれいなところに行ったりした。特にお母さんが作ってくれた「そば」は今も忘れられない味であった。「おいしい、おいしい」と言いながら食べている私を見て、お母さんは私が家に帰って一人でも作って食べられるようにそばを準備してくれた。このようなお母さんの温かさに心から感謝している。

3日間のホームステイの中、一番記憶に残っていることは日の入りのとき、お父さんと「リンゴ温泉」というところと一緒に入って、自然の美しい絶景を見たことである。その時、「幸せというのはこれではないと何だろう」と思った。3日間の予定が終わって帰る時には朝日町で有名なワインをもらった。

今回の山形県朝日町のホームステイは、日本で勉強している私が日本文化を身につけることができたいい機会であり、家族の愛情も感じられた経験であった。私はこの3日間の貴重な思い出を一生忘れないと思う。



筆者：中央

もう一つの家族

ハーンナルタナン，ルタイラット（タイ）
HANNARUTANAN, Ruthairat

今年の7月に3日間、山形県の旭町にホームステイに行った。

ホームステイというのは私にとって初めての経験だったから、行くとき、山形はどんな所だろうな、ホストファミリーが優し

いかな、楽しいホームステイになるかなと色々すごく心配で、ドキドキしてしよ

6時間かかって、ついに山形県に着いた。さすが、山形県という県名通りに、どこを見ても緑豊かな山々に目を奪われた。絵を見ているかのように本当に美しい景色だった。山形県の景色、自然の素晴らしさはもちろん、それよりも感動を受けたのは朝日町の人々の優しさである。朝日町の人は私たちを温かい気持ちで迎えてくれて、涙が出るほど、嬉しかった。

ホストファミリーと対面する時間が来た。私のホストファミリーは五十嵐さんの家族だった。お父さん（武喜さん）とお母さん（昭子さん）と初めて会った時、外見だけ見て、先入観を持っていた私は「怖いな」と思ったが、話してみると、「あ、優しい人だ」と感じた。三日間、私は新しい経験をさせてもらった。例えば、初めて納豆、鰻魚、刺身を食べたこと、箸を作ったこと、日本の花火をして遊んだこと、露天風呂に行ったことなどである。お母さんには美味しい日本料理を食べさせてもらい、浴衣を着せてもらった。お父さんのほうは、色々な観光地を案内したり、「ままけは（ご飯を食べましょう）」、「のまけは（飲みましょう）」などの方言を教えたりしてくれて、感謝した。一緒に食事したり、お話したり、遊んだりした時は本当に幸せな時間だった。お父さん・お母さんは本当の娘のように世話してくれて、懐かしい家族の雰囲気を感じさせてもらって、文章で表現し尽くせないほど、すごく感動した。

3日間は東京に帰りたくないほど幸せだったが、つらい別れの時が来た。そのとき、私は優しいお父さん・お母さんと別れたくなくて、悲しさのあまり泣き出した。「これから、私はお父さん・お母さんのことを本当の両親のように考えてもいいですか」と私はお父さん・お母さんに聞いた。お母さんはもちろん「私たちもあなたのことを本当の娘のように考えますよ。」と答えてくれた。私は嬉しくて嬉しくて、涙ながらにお母さんを抱きついた。その気持ちを昨日のこ

山形県朝日町で3日間はあっという間の時間だったが、朝日町での素晴らしい経験、忘れられない思い出、そして、お父さん・お母さんのことはあっという間ではなく、一生私の心に残る。

今回のホームステイで、私は国と国の間に国境があっても人と人との心には国境はないんだということを学ぶことができた。そして、いつか世界の国のすべてからも国境がなくなり、地球の人々が一つになれるといいと願ってやまない。



箱根旅行

グローバルの箱根

梁 里虹（中国）

LIANG, Li Hong

筆者：右

箱根を見学してから、もう数ヶ月が過ぎました。一緒に見学に行った皆様、お元気ですか。

箱根旅行といえば、整然としたアサヒビール工場、煙を噴出す大湧谷、藍色に染まった芦ノ湖と皆の笑顔が、すぐに次々と目の前に現れてくる。

11月5日、日本晴れの中、バスは大隈講堂から箱根へ向かっていく。可愛いバスガイドさんの案内を聞いたり、お互いに自己紹介したり、車窓から風景を見たりして、あっという間に最初の目的地—『アサヒビール工場』に着いた。ビール生産ラインの見学中、「ヘー」と「なるほど」という声をよく耳にした。一人なら3千数百年も飲みきれないビールタワー、一秒に30本ビールを注ぐ機械などを実際に見て、勉強になった。ビール好きな人にもっともいい勉強だったのは、新鮮なおいしいビールを味わえる試飲ではないだろうか。百人で口を揃えて声高らかに「乾杯！」を言う場面は印象的だった。

箱根関所跡で歴史の流れを感じてから、いよいよ期待していた『温泉勝地』に到着した。宿泊先は、おかだホテルとなった。箱根の名物—温泉に入った後、宴会場で盛大な宴会が行われた。食卓に並んだ料理の名前も食材もわからないが、舌鼓を打つほど美味しかったことは今でもはっきり憶えている。食事しながらおしゃべりを始めてすぐ辺りを見回すと、私は、皆が着ているお揃いの青い浴衣が、画一的な和風の美しさを醸し出しているのに気がついた。カラオケを始めたら、先生方は普通なかなかせない一面も生徒にアピールしてくれた。歌の上手な江後先生、司会の佐藤さんのお陰で盛り上がった！友人たちも皆つづいて、大いに歌った。最後の一曲となっても、皆ぐずぐずしてお絞りを振り回したりし、楽しい宴の余韻に浸っていて、誰もがなかなか帰りたいがらなかった。私は突然にその雰囲気包まれて感動した。

二日目の旅行は思わず「はっ」と息を呑むような景色ばかりだった。ロープウェイの中で、『大湧谷』の禿山、硫黄の煙を見て、硫黄のきつい匂いを嗅ぎ、火山の威厳をすぐ間近に感じた。芦ノ湖は、大湧谷とぜんぜん違う空間だった。芦ノ湖では大自然の優しい顔が見えた。海賊船の甲板にいて、涼しい湖の風を浴び、紅葉が始まった山々と鏡のような湖水が、動いている絵巻のように私たちの前に展開していた。『気持ちいい』一言では表せない。皆は慣れない日本語を使って、時々英語を混ぜて、ぺらぺらしゃべったり、けらけら笑ったりして、おしゃべりな海賊になってしまった。

『神奈川県立生命の星・地球博物館』には貴重な鉱石、恐竜の化石などがあり、面白いところだった。その後、皆はお土産屋さんに殺到して、店から出る時、誰もが両手にお土産の紙袋を持っていた。先生方も例外ではなかった。

東京という大都市で勉強生活を送っている私たちにとって、とてもリラックスできた二日間だった。短い旅行だったが、豊かな自然の中で、国籍を越えて、クラスを越えて、友情を深めることができたし、新しい出会いもあった。われわれは、もう『グローバル化』の一步を踏み出したと言えるだろう。次回の課外活動でまた皆に会えることを期待している。





そうめいせん
早明戦

12月の熱い戦い！

よしはら きよみ
吉原 清美（日本）

YOSHIHARA, Kiyomi

先日（十二月五日）国立競技場で行われたラグビーの
早明戦は、一生忘れられない経験になった。試合が始まる前

に両サイドで校歌が歌われる中、応援団の何人かによって大学の旗が立てられた。その行為には、両チームが大学を代表しており、互いを励ましながらい良い試合をしよう、という気持ちが隠されているとわかった。

この日は暖かく、まるで太陽も試合に惹かれたようだった。スタジアムに着いた時、客列の長さに驚かされた。なぜならば、早稲田大と明治大の学生に限らず、家族連れの観客もあり、スタジアムが満席だったからである。その上、報道カメラマンも多かった。やはり早明戦は、噂の通り、有名なラグビー試合なのだと感じた。

まず、早稲田のチームが最初のトライを奪い、早稲田側が盛り上がった。五点を取るたび、友達と跳びあがり、腕を組みながら応援した。しかし、二回連続で相手のチームに五点を取られた時、皆と“早稲田、早稲田”と声援し、選手達を励ました。この私たちの応援のおかげかどうかは確かではないが、早稲田は立ち直り、次々と点を取っていった。そして、早稲田が試合を49点で勝ったのだ。自分のチームが優勝して超！嬉しかった。皆も喜びを大拍手でチームに示した。

正直に言うと、初めは行こうとは思わなかったが、友達に誘われたのがきっかけで足を運び、試合に来て良かったと思った。今度も応援しに行こう、“フレイフレイ早稲田”！



筆者：中央



もち餅つき

もち餅つきの感想

マツァク、ミロスラウ（スロバキア）
MACAK, Miroslav

12月9日（木）は普通の日とちょっと違った。その日、餅つきを行ったからだ。場所はきれいな大隈庭園だった。その日の授業は、2時限は30分早く終了し、

そして、3時限は30分くらい遅れて行くことが出来た。だから、多くの留学生が餅つきに参加できたのかもしれない。

私の出身はスロバキアという中央ヨーロッパに位置している国だ。普通のスロバキア人に「餅つきというのとは何か」と聞いたら、正しい答えはあまりないと思う。しかし、「相撲という日本の伝統的なレスリングを知っているか」と聞いたら、正しい答えが返ってくる確立は、前者と比べると反対になると思う。その理由は、あるスポーツチャンネルが相撲トーナメントをよくテレビで放送しているからかもしれない。

今はまた場所の話に戻ろう。私はクラスメートと一緒に、始まる5分前に大隈庭園に行った。その場所には、市場のように屋台が建てられ、親切な女性が「どうぞお餅を食べてみてください。甘いのと甘いものとどちらのほうが好きですか」と聞いていた。私は甘い餅も甘くない餅も取った。餅を食べながら、頭の中で3年前のことを思い出した。

3年前のその日、スロバキアの首都、ブラチスラヴァで日本文化週間というフェスティバルが行われた。そこで私は初めて餅を食べた。そこで餅の味とやわらかさを比べたかった。味はだいたい同じような気がする。一方、やわらかさはずいぶん違った。ブラチスラヴァで食べた餅はもっとやわらかかったと思う。私にとって、大隈庭園で食べた餅はちょっと食べにくかった。他の友達を見たら、まるで自分の姿を鏡に映して見るようだった。一番目の問題は餅を箸で取って、トレーから放すことだった。これを処理した後、二番目の問題が起こった。餅が喉に詰った。この問題もすぐに解決できた。最も適当な食べ方は口に少量を入れ、よく噛むことだ。餅を食べながら、皆は餅をつくことを大変楽しみにしていた。力士が3人来た。私は力士が高校生ぐらいの年齢に見えたので大変びっくりした。それなのに、餅つきが上手だった。多くの留学生はすぐにカメラをケースから取り出して、写真をわくわくしながら撮り始めた。力士による餅つきが終わった後、「誰か餅つきをやってみたいですか」と聞かれた。男の留学生がたくさん前に集まって、もちろん餅つきをやりたいと言った。私もぜひ餅つきをしたかった。クラスメートと一緒に大きな木槌を取って、餅をつき始めた。皆は「よいしょ」という言葉を大きな声で言って、素晴らしい雰囲気を作った。まず、男性だけ餅つきをやった。その時、女性は後ろに立って、写真を撮っていた。そして、次に餅つきをしたい女性が少しずつ前に集まって、この息を飲むような活動をした。女性も餅つきがうまく出来た。やがてこの素晴らしい催し物が終わった。皆は楽しい気分で教室へ戻った。

私にとって、一番楽しいのは国籍と男女を問わず、皆一緒に素晴らしい雰囲気を経験することができたことだ。だから、日本語研究教育センターが次の課外活動を計画したら、ぜひ参加したいと思う。今から楽しみだ。

課 外 活 動 フ ォ ト ギ ャ ラ リ ー

言葉は、日常生活や活動のなかで息づいています。

当センターでは、別科生が日本の社会や文化についての理解を深めることを目的として、積極的に課外活動を展開しています。教室を飛び出した学生は、生き生きと表情も言葉も豊かになります。

世界各国からの仲間やスタッフとの交流を楽しむ学生の表情をご覧ください。

山形ホームステイ（2004年7月23～24日）



もちつき大会（2004年12月9日）

大隈庭園にて荒汐部屋の力士3人とボランティアさんが大活躍！



箱根旅行（2004年11月5～6日）



アサヒビール工場前

各国紹介



筆者：雲取山を背景にして

スイスを知っていますか？

デパスクアレ ミカエル(スイス)
DE PASQUALE Michael

スイスというのは、どんな国だと思いますか？アルプスの少女（ハイジ）の国だけですか？世界中で、スイスについて伝統的なイメージを持っている人が多いと思われるので、この紹介で、私は適当なイメージを表したいと思う。

スイスは欧州にあり、境界の国はフランス、イタリア、ドイツ、オーストリア、リヒテンシュタインである。ヨーロッパの地図を見ると、スイスは真中で、小さい国である。地理的には、スイスはもちろん山の国であるし、川や森もたくさんあるし、自然が多くて美しい。スイスの政府にとって、環境の問題はとても大切で、汚染に対して重大な関心がある。スイスで、人と自然はよく共存できていると思う。面積（41,290km²）は九州の面積（42,182km²）と同じくらいで、小さいけれど、一番有名な山（マッターホルン山）4,478mがある。スイスの人口は約7,367,900人で、東京の人口より少ない。



スイス人はスイス語を話すと思いますか？国語について、スイスの状態を知っている人は多くないだろう。実は、スイスの国語はスイス語ではなく、公用語として四つの言葉が認められている。スイスの言語と文化は関係があり、言葉ごとに異なる文化をもつ四つの地方がある。言語区分は：1.ドイツ語（63.7%）2.フランス語（20.4%）3.イタリア語（6.5%）4.ロマンシュ語（0.5%）である。スイス政府は、その四つの公用語を使っていて、世界中でそれはかなり特別だと思われる。しかし、スイス人はみんなこの四つの言葉が話せるわけではなくて、普通は二つができる。学生時代、私はフランス語地方に住んでいたから、ドイツ語と英語をすぐ習った。仕事のために、一番大切な言語はフランス語とドイツ語である。



言語区分はスイスの歴史から来ている。隣の国がスイスに重大な影響を及ぼしたのだ。スイスの現在の形・状態は19世紀に決まった。その前は、国家としてスイスは存在していなかった。1291年に田舎の三つの共同体が同盟し、それが、スイスの創立と考えられている。その同盟がだんだん広がって、1848年に憲法が発表され、スイスは近代国家として構築された。ベルンという町が首都になった。

フランス語地方のローザンヌという町で住んでいるので、私の町も紹介しようと思う。ローザンヌはレマン湖の湖岸に位置し、反対側はフランスである。ローザンヌはにぎやかで、文化や歴史がおもしろい町だ。今でも、古代史と中世史の遺跡



が見られる。ローザンヌの古い部分は魅惑的だ。観光に関してとても有名だし、世界中から見学しに来る人もいるし、開放的な町だ。また、ローザンヌにはオリンピック国際委員会（CIO）があるので、スポーツにとっても大きな意味を持っている。さらに、ローザンヌにはイタリア人やスペイン人、トルコ人やアフリカ人など、色々な違う国の人々が一緒に生活している。その点で、ローザンヌはCosmopolitan という意識がある町だと思う。

日本からスイスは遠いけれど、魅力的だし、開放的できれいな国だから、是非行ってみたい！

スイスフォトギャラリー



参考URL <http://www.swissworld.org>より掲載

人物往来

新任のことは



日本語研究教育センター事務スタッフ 齋藤 由香里

はじめまして。

2004年9月1日付けで日本語センターに配属になりました齋藤由香里と申します。

私は、オーストラリアのメルボルンで生まれ、2歳の時にはじめて日本へ来ました。とは言っても、私自身がその事を鮮明に覚えているわけではありませんが...

幼稚園、小学校と東京で生活し、中学1年生の時にまたオーストラリアのメルボルンへ戻りました。そして、3年半程前にまた日本に来ました。ちょっと複雑ですが、みなさん、ここまで理解出来ましたか？

オーストラリアは、南半球に位置する大陸です。北半球にある日本とは、季節が真逆です。1月ですと日本は寒い真冬ですが、オーストラリアは真夏なのでとても暑く40度以上になる日もあります。従って、12月のクリスマスも真夏なので、サンタクロースはトナカイに引かれたりではなく、サーフボードに乗ってやって来たりもします（！）。更に真逆なのは季節だけでなく、月の満ち欠けや、星座の位置も違います。日本からは南十字星は見えません。残念！

オーストラリアは、日本と同じように周りを海で囲まれています。陸続きで他国がないので、オーストラリアにしかない生き物がたくさんいます。みなさんがご存知なのは、コアラやカンガルー、カモノハシ、ワライカワセミ、エリマキトカゲなどではないでしょうか。

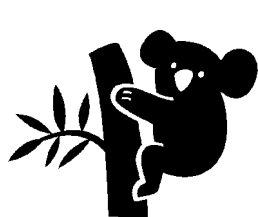
そんなオーストラリアで育った私ですが、そのせいか逆に普通の日本人以上に自分が日本人ということ意識するようになりました。着物を着たり、お寺に行ったり...日本では普通のことですがとても新鮮です。

そういう点は、別科生の皆さんに通じるものがあるかも知れませんね。日本の歴史などはあまり詳しくないですが、皆さんの日本での生活がより充実するようお手伝いさせて頂きたいと思っていますので、わからないことや助けて欲しいことがあれば、遠慮なく事務所に来て聞いて下さい。

早稲田大学での1年間をエンジョイし、日本を好きになってくれたらとても嬉しいです。



上空12,000フィート！



ブラジル見聞記



「パネトーネ (Panettone)」 ブラジルのクリスマスの定番！

ブラジルのクリスマス

日本語センター職員 まつの 志穂

私は今、大学の研修制度を利用してブラジルのサンパウロにきています。クリスマスといえば、冬、雪、静かによりそう恋人たちといったイメージしかもっていませんでしたが、ここは南半球、真夏です。ガラガラした

太陽のもと、豪快な笑い声があちこちで聞こえます。

キリスト教徒が国民の80%以上をしめるこの国では、クリスマスは新年より重要な日と位置づけられ、家族や親戚、親しい友だちと盛大にお祝いすることが多いようです。もともとパーティ好きのブラジル人ですが、中でもクリスマスは特別です。私がブラジルに来た11月の末には、スーパーにパネトーネ (Panettone) という、クリスマスシーズンならではのスポンジケーキが並び、少しずつクリスマスの雰囲気は漂い始めていました。クリスマス前1週間は、あちこちで忘年会が開かれ、サンパウロの夜が一層騒がしくなりました。そして、忘年会の最後は、いつにも増して長く強いハグ (抱擁) で、一年分の感謝や親しみを表現します。普段の日でも、出会いと別れの際には30人いれば30人と抱擁を交わすブラジル人ですが、年の最後のパーティでは、席を立ててから、本当に帰るまでに、コーヒーを一杯ゆっくり飲めるほど時間がかかります。一体ブラジル人は一生のうち、どれくらいの時間をハグに費やしているのだろう、と考えてしまったほどです。

24日の夜は家族や親戚とクリスマスのお祝いをします。私が参加したクリスマスパーティは24日の夜11時にはじまりました。クリスマスのごちそうを食べ、ゲームやプレゼント交換をしながら、パーティは25日の朝方近くまで続きます。25日はのんびりお昼ごろ起きると、今度はシュラスコ (焼肉料理) パーティが始まりました。肉を食べ続けて、デザートまで食べるともう夕方。さすがに食べ疲れたなと思いながら少し休んでいると、他の人たちは、またお皿を手に立ち上がっているではありませんか。結局、料理との戦いが終わったのは25日の夜中近くでした。

クリスマスを境に、南米最大の都市、サンパウロも急に静かになりました。一年中途切れることのない交通渋滞も解消され、働き者で有名なパウリスターナ (サンパウロの人のこと) も心なしかのんびりした雰囲気です。クリスマスを境に休みになる会社や商店も多く、また、クリスマス後は都会を離れて、ビーチに出かける人がたくさんいるので、街は突然静かになるのです。

年が明けると、平和を意味する白い服を着た人が街にあふれ、静かな日々の始まりを予感させましたが、そこはブラジル、なかなか休ませてはくれません。踊りたい人は、どうぞいらっしゃい。ブラジルのカーニバルがもうすぐはじまります！



サンバを弾くサンタたち♪

修了生のみなさんへ

2004年度秋学期修了生のみなさんへ

修了おめでとうございます。1年間異国の地で良くがんばりましたね。みなさんの輝かしい前途を、教職員一同心からお祈り申し上げます。

掲示板のお知らせ：別科生のページからアクセスできます。

http://bbs12.otd.co.jp/1223567/bbs_plain

修了生の図書館利用について

別科の皆さんは、修了後も早稲田大学の図書館を利用することができます。（ただし、貸出はできません。）図書館に行く前に、日本語センター事務所で手続きが必要です。

日本語センターからのお知らせ

別科日本語専修課程：2005年度9月入学生募集

一般公募による別科日本語専修課程2005年度9月入学生を下記のとおり募集します。入学願書は日本語センター事務所で販売しています。詳細は、日本語センターのホームページをご覧ください。

URL： <http://www.waseda.jp/cjl> TEL:03-5273-3142

出 願 資 格	原則として、下記の条件を満たす者。 4年制大学（日本の大学の学部に対応する課程）に在籍中またはこれを卒業した者。 日本もしくは日本語に関する研究や教育を志す者、またはこれらに従事している者。
募 集 定 員	4月入学・9月入学をあわせて 約80名
修 業 年 限	1年間（2005年9月21日～2006年9月20日）
出 願 受 付 期 間	2005年4月1日（金）～4月11日（月）

2005年度日本語教育学公開講座のお知らせ

今年度も大変ご好評をいただきました「日本語教育学公開講座」。来年度も2005年4月よりスタートします。講義予定や申し込みについては、ホームページをご覧ください。お電話にてお問い合わせください。

日本語センターニュース 第18号
2005年1月24日発行

発行

早稲田大学日本語研究教育センター
CENTER FOR JAPANESE LANGUAGE
WASEDA UNIVERSITY

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-7-14
1-7-14, Nishi-Waseda, Shinjuku-ku, Tokyo 169-8050
TEL : 03-5273-3142 FAX : 03-3203-7672
E-mail : cjl@list.waseda.jp
URL : <http://www.waseda.jp/cjl>